

やまなし 犬と生きる風景

〈上〉

ペットフード協会（東京）が昨年行った調査で、国内の猫の推定飼育数が初めて犬の数を上回ったという発表が年の瀬にあった。今年はいぬ年、猫に負けてはいられない。山梨県内には、さまざまな立場で犬を伴侶として生きる人たちがいる。犬と織りなす暮らしからは、どんな風景が見えるだろうか。

南向きの大きな窓から柔らかな日差しが込む、どちペインクリニックの玉穂ふれあい診療所（中央市成島）の一室。渡辺登美子さん（89）はベッドの上から、部屋へ入ってきた犬のラッシーに「おいで、おいで」と手を伸ばし、入院当初には見られなかった穏やかな笑顔を見せた。

寄り添う

ラッシーは、リリーとともに2014年から同診療所に常駐するセラピードッグだ。毎朝、看護師と一緒に病室を巡回し、昼食や夕食の配膳にもついて回る。日中は各病室に入ったり、ラウンジでくつろいだりして院内で自由に過ごし、患者や見舞いの家

セラピードッグ 診療所に常駐



昼食時にそばへ来たラッシーをなでる渡辺登美子さん（右）。その様子を長田牧江統括看護師長は笑顔で見守った

「無口な友人」心ほぐす

族らが触れ合う。アニマルセラピーを研究する日本保健医療大保健医療学部看護学科（埼玉）の熊坂隆行教授によると、訪問活動としてセラピードッグを取り入れる医療機関は多いが、常駐するのは全国的にも珍しい。

渡辺さんは腰部圧迫骨折で昨年10月から入院生活を送る。少し前に同居していた弟が緊急入院し、渡辺さんは大きく背骨が曲がった体で、一人で家事をこなしていた。体の痛みに加え、突然の異常事態に戸惑い、入院当初は職員の声掛けにも表情は硬く、拒絶感を示した。

ラッシーとリリーは、そんな渡辺さんの手をなめたり、座っている膝の上に顔をのせたりして静かに寄り添った。自宅犬を飼っていたこともある渡辺さんは、「かわいいね」と声を掛けるなど犬には次第に心を開いていた。

2匹は山梨セラピードッグクラブ（中村幹代表）で訓練を受けた犬で、動物好きの患者にとって家庭と同じように「動物がいる入院環境を整えたい」という看護ケアとして、同診療所が導入した。

きつかけとなったのは、終末期に最後の願いとして、愛する」という看護ケアとして、同診療所が導入した。



セラピードッグは職員との癒やしにもなっているという11匹いずれも中央・玉穂ふれあい診療所

心身両面で効果

熊坂隆行教授によると、国内では一般的に「一緒に散歩することによる身体的効果、心を癒やすなどの心理的効果」をもたらず犬をセラピードッグと呼ぶ。1990年代後半から、社会の変化に伴うストレスなどで精神的疾患を抱える人が増加し、癒やすセラピードッグの意味が広まった。

セラピードッグを日本語に訳すと「療法・治療犬」だが、医師の治療プログラムに基づき、精神や機能治療を目的とした動物介在療法は、日本では行われていない。

「生活の場」としての環境を整えたい

〈杉原みずき〉